

平成 21 年度

事業所名 : グループホーム「平」

## 1 自己評価及び外部評価結果

### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390300077		
法人名	社会福祉法人 典人会		
事業所名	グループホーム「平」		
所在地	〒022-0002 岩手県大船渡市大船渡町字下平24-1		
自己評価作成日	平成 22年 2月 25 日	評価結果市町村受理日	平成 22年 5月 18日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0390300077&amp;SCD=320">http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0390300077&amp;SCD=320</a>
----------	---

### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成 22年 3月 15日

### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

大船渡湾を臨む高台に、認知症対応型共同生活介護(グループホーム)と小規模多機能型居宅介護二つの事業所が併設した県内でも珍しい当施設は、その良さを活かし、グループホーム「平」に夫が入居し、妻が小規模多機能ホーム「平」に通って来て日中共に過ごすという利用スタイルの夫婦が二組いる。自宅からほど近いホームで以前と変わらず夫婦が顔を合せ、妻が作った料理を食べて夫も安心して生活を送っている。利用者、職員が同じ建物の中で家族として共生できるようにと利用者も含めて考えた理念のもと試行錯誤しながら、ゆっくりと過ぎる時間の中でケアを行なっている。また、定期的な運営推進会議の開催により情報を得ながら、地域の人たちに支えられ、多く交流を持っている。

### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

大船渡湾を望むオーシャンビューは大きな魅力で、観光ホテルに滞在するかのような気分を味わうことができ、長く大船渡に暮らす人にとっては、自分の地域を様々な思いと共に感じることもできる風景ともなっている。家族に送られる七福神日記は、利用者の日々の状況が瑞々しく伝わるよう配慮されており非常に好評のほか、運営推進会議は地域から20人近くが参加し、「平ホーム盛り上げ隊」というネーミングで地域活動にも発展できそうな活気を生んでおり、大きな特徴となっている。小規模多機能と併せた体制からは利用者の在宅復帰も視野に捉えることも可能であり、近隣住民や他機関との協働など、広い視点で地域に波及する活動と、ネットワークの中核として根付いていくことが今後期待できる事業所である。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

[評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

事業所名 : グループホーム「平」

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者も交えたスタッフ研修で事業所の理念づくりを行なった。それはグループホーム「平」のスタッフの共通目標となっている。	開所から半年ほど経過した時点で全員で理念の検討し、「80歳の自分」をイメージしながら「私のしたいこと」「居場所」といった複数の観点で意見を出し合った。それらが「家族」「仲良く」「おいしい」といった理念の要素となっている。	理念の検討には利用者も参加し、意見をだしている。全員で理念を検討することは、事業所としての共有性や1人1人の主体性を高めるという点で意義が大きい。今後みんなが参加しての、事業所の姿勢作りに期待したい。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	運営推進会議の定期開催や地域住民による踊りのボランティアによる交流がある。夏には地域の子供達を集めた七夕交流会を執行し世代間交流の場とした。	事業所への協力を依頼してだけでなく、住民の「何か地域の役にたちたい」という気持ちにも視点をおき、開設準備段階から多くの人たちと交流が持たれている。また近隣からの利用者も多く、日々の実生活に根付いた協力関係が築かれている。	交流の輪を広げていくことに加えて、事業所では近隣地区の住宅地図をベースとした支援マップ作りにも取り組んでいる。地域を目に見える形で意識できると共に、地域協働の成果物として今後さらに内容の充実が期待できる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症についての相談が多く、随時対応し、実態調査も行なっている。法人で事務局となっている「認知症の人と家族の会」主催のつどいへの案内も、家族や運営推進委員等へ配布し、一緒に参加している。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者及び家族の代表、民生委員や地域役員・ボランティアの参加のもと、2か月毎に定期開催している。会議での内容はすぐ、避難訓練、七夕交流会、敬老会での七福神踊り等、ホームの活動に活かされている。	災害対応や地区環境整備等の相談や、神棚の飾り方など地域風習や、郷土芸能である「平の七福神踊り」に関するアドバイスなど、話題は多岐にわたっている。また地域からの参加者が20名近くあり、そこに利用者、家族、職員等も含めて多数で開催されているのも特色である。	親しみやすいものとして「平ホーム盛り上げ隊」というネーミングや、人数が多くても全員に話してもらおう進行など、参加のしやすさに配慮がなされている。事業所運営だけでなく、近隣地区の共助を推進するものとしても、今後さらに期待される。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に毎月参加して頂いている。また、地域ケア会議・事業所連絡会への出席をし、情報交換を行っている。	地区交番との良好な協力関係が築かれてる他、支援マップ作りで把握される地域情報は行政にも役立つものとなっている。また建設課にも働き掛け、除雪やカーブミラー設置等、地区の環境整備に関する協力も得られている。	事業所の地域に対する取り組みは、行政にとっても大きな助けとなっていると考えられる。支援マップ作りでの地域把握等において、今後より協働が促進されることを期待したい。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	夜間は防犯のため玄関の施錠を行なっているが、日中は行っていない。「身体拘束ゼロを目指して」のパンフレット等を資料にスタッフ研修を行ない、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	身体拘束を要する人はこれまでなかった半面、気づくことなく利用者を制限してしまうことへの振り返りや、転倒などを防ぐための検討は今後の課題としている。なお、身体拘束廃止に関する学習の機会を継続的にもつ予定である。	開設から1年経過し、事業所および職員一人一人に経験も備わってきたなかで、検討材料は十分にあると思われる。利用者の自由と安全という表面的には相反しやすい視点について、継続的な検討を期待したい。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止にむけた法人全体研修会に参加し、介護現場での職員のストレス軽減や高齢者の尊厳を大切にケアのあり方について学んだ。また、			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業を利用している利用者があり、支援員が来所の際は職員が話し合いに参加している。家族の会主催の制度研修に数名参加したが、今後事業所内でも学びたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分な説明を行ない、本人や家族の理解・納得を図っている。また、必要に応じ説明を行ない、疑問点の解消を怠らないよう十分留意している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議には、必ず利用者や家族等に参加頂いている。また、契約時、重要事項説明の中で苦情受付機関の説明をしている。今後、家族アンケートを行ない運営に反映させたい。	頻繁に訪れる家族とは十分に話せるが、遠方の家族も多く、どのような気持ちでいるのかを伝えてもらうものとしてアンケート調査を検討している。また家族の本人理解を支援する上で、丁寧な連絡や一緒に過ごす場面を作っていくなど、本人との接点を増やすことに力を入れている。	毎月家族に郵送される七福神日記は、本人の毎日の様子を端的に、かつ表情も見えるような豊かさで書かれており素晴らしい。家族からも非常に好評で、事業所活動と本人の理解を支えるものとして、今後も継続が期待される。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人で毎週定期開催の主務者会議の中で、各事業所からの状況報告・意見・提案がある。また、管理者は日々の申し送りやミーティング、月毎のスタッフミーティングを通して意見・提案を聞き、反映に努めている。	所内の話し合いをもとに、新年度は利用者の安全や安心に視点をおいた「暮らしの充実」に力をいれていく予定である。また職員からの提案で開設1周年の記念行事を検討し、これまでの歩みを振り返りたいとしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人の就業規則や給与規程に沿った労務管理に努めている。また、全国大会や海外研修等視野を広げられる機会があり、職員のやりがいの一因となっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各種研修会に適任者を参加させ、専門的に業務に従事できるよう努めている。また、法人内で全体研修会を定期開催したり、OJT実践日誌の活用で職員間の学び合いを進めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	認知症介護指導者を管理者におき、認知症ネットワークづくりの要としている。また、リーダー研修等の受け入れを積極的に行ない、同業者との交流の機会を持ち、サービスの質の向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の認知症状や生活歴、病歴などをもとに本人の思いや、要望、嗜好を関わりの中から探っている。それをセンター方式のアセスメント用紙に記入し、情報共有しながら戸惑いのある初期のケアに活かしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初期の段階から家族の悩みや思いに十分耳を傾け、家族の理解者である姿勢で相談に臨み、不安解消を図っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族の話の中から最優先のニーズを見つけ出し、当事業所の特徴も踏まえつつ検討を行ない、必要に応じた他のサービス利用の提案も行なっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	調理や掃除などの家事だけでなくミーティング、朝の朝礼等あらゆる場にお年寄りの参加がある。職員は人生の先輩から学ぶ姿勢を大切にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	運営推進会議や各種研修にご参加いただき、本人を支えるための学習や話し合いの場を持っています。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	自宅へ行きたいという本人の思いを一部ではあるものの叶え、家族と一緒にいる時間を作っている。また、個々の行きつけの床屋を利用したり馴染みの方に会いに行くドライブもしている。	自宅に行って家族と過ごしたり、庭の手入れをしている人がいる他、併設の事業所に通ってくる妻と日中過ごしたり、親戚が複数で訪ねてくれる等、利用者のもつ習慣や関係性が日々の場面においても実現できるよう配慮している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	生活の場であるグループホームの中で、それぞれの生活リズムに合わせて、一緒に活動できそうなところには職員が間に入り交流を持つようになっています。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	本人や家族が安心した生活が送れるように相談を受けたり、その後の家族の状況を把握するようにして、関係を切らないようにしています。			
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式等にてアセスメントを行ない、ご本人の希望や意向の把握に努めている。困難な場合には、家族から話を聞いたり、スタッフミーティング研修の中で本人を知ることにも努め共通認識を図っている。	職員間で話し合ったり、家族の力も借りながら本人の内的理解を進めている。職員同士で「〇〇さんを知っている競争」として、意欲的に利用者の気持ちに引き合い、得られた気づきはすぐに実行するようにしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	居室の環境として、今まで自宅で使用した家具を持ちこむなど、安心できる居場所づくりをしている。これまでの暮らし等を詳しく記入できるアセスメントシートを使用し、ミーティング等で情報の共有を図っている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	小規模多機能との併設という環境の中、それぞれが落ち着いて生活できるよう模索している。表情や行動がいつもと違う際には言葉掛けを多くし、原因の把握に努め、スタッフ間で共有している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアカンファレンスや日々のミーティングの中で意見を出し合いモニタリング・ケアプラン作成している。家族からの意見や情報も連絡事項で共有している。	その人らしさ、安らぎ、力の発揮、安全と健康、馴染み継続といったことを長期的な支援の視点としてケアプランを検討している。昨年後半から小規模多機能の様式も試行的に用いて、1日の流れを具体性をもって意識するようにしている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	普段からの共に過ごす時間がアセスメントの機会であり、どの行動の時も本人の表情や言葉を伺い、記録している。そこで得た情報を職員間で話し合い計画見直しについても話し合いを持っている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	自宅への帰宅を家族と連絡調整しながら本人のニーズに合わせて行なっているケースもある。小規模多機能との併設であるので、二つの事業所で連携し柔軟な支援について、多くの可能性を持っている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	「地域ケアマップ」を掲示し、地域資源の把握に努めている。ご家族や近隣の方々からの協力を頂くことにより、その人らしい暮らしの支援に努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からのかかりつけ医への受診を継続し、症状に合わせて受診調整を家族と連絡しながら行なっている。	定期受診は家族つきそいを基本としているが、家族が遠方などの事情から職員が対応することも半数程度ある。認知症の症状別の理解を深めることで医師とのやり取りもスムーズになり、家族の安心感も高まっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	専門知識の豊富な看護職員を兼務で配置している。介護職員はお年寄りと共に生活することで体調の変化や急変時に対応しており、ミーティングや記録物による連絡で介護職、看護職が情報を共有している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院先の医療機関に出向き、本人を見舞うだけでなく、看護師との情報交換を行なうなどして、病院との関係づくりに努めている。退院にあっても、家族とともに医師等と話しあったり、書面で報告を頂いている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	新しい事業所なので、早い段階での話し合いとはなっていないのが現状である。	疾病の症状が重い場合や不安定なケースは入院となっていたが、重度化や終末期というケースで検討を要したことはなかった。まだ開設から1年ということもあり、本人や家族にも明確な意向はないが、今後信頼を得ていく中で生じてくる要望は検討していきたいとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時や事故発生時におけるマニュアルを作成しており、ミーティングで全職員で確認している。応急手当については研修に参加した職員もあるが、定期的なものは行なっていないので、今後の課題である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	運営推進会議として、地域の方々にも協力頂きながら夜間防災訓練を行なった。地震や津波発生時には、避難場所として利用出来ることを市役所や町内会役員に連絡し、実際に利用頂いた。	職員の一部がすぐ近くに在住しているほか、災害時には緊急広報放送をきいて近隣住民も駆けつける体制となっている。消防車が来たときの消火栓も支援マップで把握しているほか、高台にあるため津波の避難場所としてPRされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	今まで生きてきた過程を尊重することを心掛けている。信頼関係を築くためにも言葉遣いに注意し、感謝の気持ちを込め関わっている。時折、なれ合いによる不適切な言葉があるのでそこに疑問をもち確認し合っている。	利用者と関わる際の言葉遣いでは、親しさが過ぎないように気を付けている。また家族への七福神日記でも、家族の気持ちを尊重した表現に配慮しており、短文ながらも家族の関心に応える内容を心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	指示的な言葉掛けはしないよう努め、自己決定を促す「～はどうですか？」という言葉を使うよう心掛けている。外出や衣類選びなどに、自己決定ができる場面が残されているので、アセスメントを大切にしていきたい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	無理な強要はせず、のんびりと暮せるよう努めている。希望はできるだけ尊重するものの、意欲に欠ける希望だったりするので、生活のリズムがつくよう心がけながら利用者との話し合いを行なっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	鏡の前での整髪、髭剃りの促し、電気カミソリの充電、自分で化粧をしている方への褒める声かけなど、身だしなみやおしゃれが自発的にできるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	これまで培ってきた調理方法を十分に発揮して頂くように得意なことに取り組んで準備から後片付けを一緒に行なっている	近所からいただいた野菜を調理したり、近くの市場で買った秋刀魚をバーベキューで楽しんでいる。利用者にも調理や配ぜん、後片付けを手伝ってもらい、訪問日当日も利用者からお茶や果物、昼食など様々なもてなしを受けた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	調理員を中心に、それぞれの食事習慣や体調の変化により、食事の内容を変更し、食事しやすいように提供している。摂取量を記録し把握している。便秘がちの方にも献立で工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、声かけ誘導し、一緒に歯磨きを行なっている。うがい・お茶のみなどでも口腔内の清潔に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し、便意や尿意時のサインに気づくよう努め、誘導し自分のできることをして頂いている。羞恥心に配慮しながら、気持ちよく排泄できるように支援している。	利用者の行動から排泄のサインを察し、声かけすることでトイレに誘導している。水分制限のある人等は細かく排泄状況を観察する他、トイレの場所がわからなくなる人には、馴染みのある「便所」という表現で案内している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	薬に頼りすぎないようにしたいと考え食事には食物繊維のものや消化の良い物を毎食取り入れたり乳製品の摂取もすすめている。軽体操等で運動する機会も設けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	本人の体調や気分に合わせて、仲の良い同士で楽しく入浴できるよう関係性を考慮し、支援しているが、入浴を促す声かけは清潔保持を考慮し、職員から決めてしまいがちである。	併設の小規模多機能の浴室も使うことができるため、時間帯や複数で入りたいなどの要望に柔軟に対応している。またお風呂から上がったお湯を抜いていたなど、これまでの自宅での入浴習慣も把握しながら可能な限り配慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	安心して休息できる場所が個々にあり、小規模多機能に通いで利用されている妻とコタツで横になって安心して居る方もいる。居室の照明や温度調整も好みを聞いている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	「薬の説明書」をファイルし、内容確認がすぐできるようにしている。状態に特に観察が必要な場合はアセスメントD-4シートを使用し、把握に努め、過剰な用量の服薬とならないよう主治医との連携に役立っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ご自身が食事の準備、片付けをやりがいを持って、日常活動している。宮沢賢治に憧れている利用者のニーズに応え、花巻にある記念館へ出かけるなどもしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	毎日の食材料を買いに近くのスーパーへ出かけて、店内で知人の方へ会ったり、子供を見てとても喜んだり気分転換を図っている。一人ひとりの希望をできるだけ取り入れて外出の機会を設けている。	小規模多機能事業所と合同で、宮沢賢治記念館など遠方のドライブに出かけることがある。日常的にはすぐ近くの公園まで歩きながら地域の人たちと挨拶を交わしており、坂道のため帰りは車で迎えに行くなどしながら散歩を支援している。	



自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物や外食をした際には、自身で支払いしてもらうようにしている。ハガキやペンなどを選んで購入している。また、小遣い帳や出納簿のコピーを見せ、必ず家族からの理解を得ている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の意向をふまえながら、出来る限り本人の希望に沿って家族への電話による連絡をしている。また、場合によっては代弁させていただく等の対応も行なっている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有スペースも居室と同様に落ち着いた雰囲気や保たれており和室、コタツ、ソファ等生活感を出している。リビングや玄関等には季節を演出する小物を飾り付けている。	複数のイス・テーブルやテレビ前のソファ、大勢で囲める丸テーブルなど、利用者がそれぞれに過ごしている他、座敷スペースのこたつで談笑している人たちも多い。小規模の利用者も行き交うなかで大勢というにぎやかさと、1人でゆっくりすることもできるバランスの良さが感じられ、窓から見える大船渡湾の眺望にも心癒される。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	座る場所や、椅子、テーブルなど自然に定位置となり、馴染んで過ごしている。和室に設置した炬燵はくつろぎの場となる他に小規模多機能ホームの利用者や地域の方との交流の場となっている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際や入居後も、自宅で使い慣れた馴染みのベット、タンスを持ち込んでもらうことの意味を家族に理解協力してもらっている。その他にも家族の写真や自分の写真を飾るなどで、和んでもらっている。	友人の書いた水墨画が屏風のようにしつらえてあったり、家族の似顔絵、思い出の写真など、利用者の楽しみや個性が各部屋に表れており、まさにその人だけの居場所といった印象を受ける。また他利用者を部屋に招いてお茶を飲んだり、一緒に踊ったりすることもある。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの場所がわかるよう表示物を作ったり、洗面所では本人自ら整髪髭剃り歯磨きなど行なえるように配置したりと本人のできることを活かせるよう支援している。			